# 妙見祭の奴

## 奴（やっこ）の由来

妙見祭の奴の始まりは、『御書附上』によると、松井家4代直之(1638～1692）の頃、松江村の虎右衛門が江戸へお供をした際に習い覚え、行列に参加するようになったと書かれています。

以来松江村から毎年奉納していましたが、高子原村の三助(虎右衛門の婿）が虎右衛門より奴の振り方を伝授されると、松江村・高子原村両村より奉納されるようになりました。その後高子原村一村で奉納することになり、三助から虎右衛門の甥の加（嘉）平に伝授された後は代々加平の血筋である田中家を師匠家として伝えられることとなりました。

奴組には「高子原村以外の村から妻をもらった者は加えない」「奴を振った者は他の村から妻をもらうことは出来ない」など厳しい決まりがあり、加入にあたってもいろいろな制限があったことがわかっています。

## さまざまな行事

### ■練習・町内回り

11月初旬より練習を始め、15日の夜、会長の家を皮切りに各家々を回ります。

新入りの家で「祝いめでた」を歌います。

### ■妙見祭当日(11/23)

出発前のお祓い

道具の準備

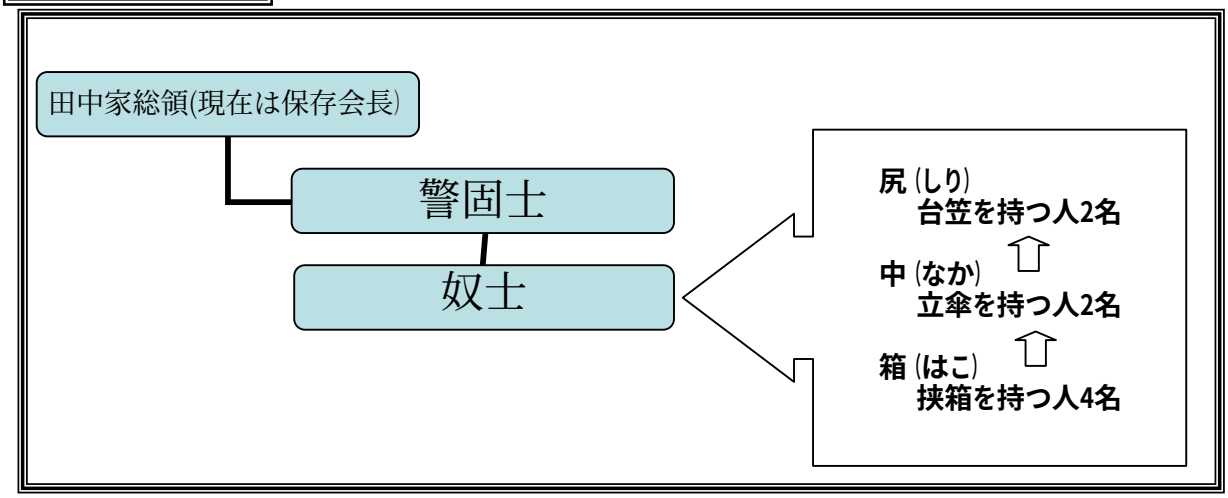
独特の結び方「花結び」

駅前で奴振り

奴の振り方には5種類あり、挟箱を地面に下ろすやり方によってそれぞれ**「左ゲバ(下馬）」「右ゲバ」「イキガカリ」「タテヅメ」「ツメ」**と呼ばれています。

〔掛け声]
せいとこせい　とこせい（空方：道具を持っていない奴士）
ぐいとせい（持方：道具を持って演技する奴士）
やーさとさー　こるわせい（空方）
まつかしょさー　こるわせい（持方）
[交替の掛け声]
こーいち（空方）　※中と尻のみ
えいとことっては　せいとこせい(持方）

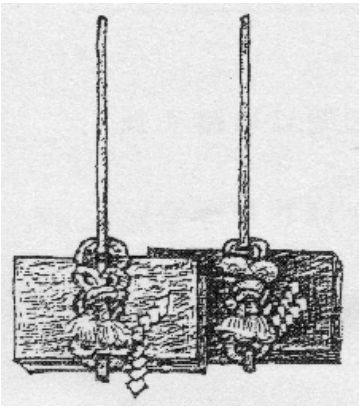
## 奴組の組織




■**警固士**（けいごし）…奴士を終えた人。奴士の指導や奴組の世話を行っています。
■**奴　士**(やっこし）…2人1組となり箱持ちから始めて中、尻と経験をつみながら上がっていきます。現在は、6年程で奴士をつとめ上げて警固士になります。以前は8～9年つとめ上げなければ警固士になれないほど厳しいものでした。

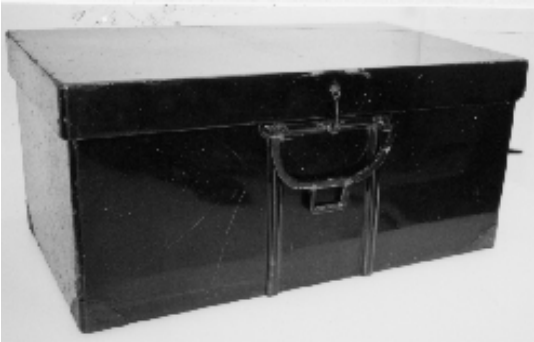
## 奴の道具

**挟箱（はさみばこ）**
城主の衣装を入れる箱



**台笠（だいがさ）**
城主のかぶり笠

**立傘（たてがさ）**
雨天の時、城主にさしかける傘



**挟　箱**

現在は使われていませんが、ふたの裏に「奉納　昭和四年拾一月　松井家」と書かれており、松井家から贈られたことのわかる貴重な資料です。